

## 平成 23 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること)

難治てんかんをもつ人の病気と共に生きる体験  
—病気も本来の自分と認めるつらさ—

学位の種類: 修士 ( 看護学 )

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号: 10894608

氏名: 加藤 智子

(指導教員名: 勝野 とわ子 )

注: 1,000 字程度 (欧文の場合 300 ワード程度) で、本様式 1 枚 (A4 版) に収めること

病気をもつ人の体験の研究は、同じ状況にある人の看護ケアを考えるために有用であると言われている。てんかんをもつ人の研究は小児に関する研究が多く、医師による報告や研究がほとんどである。看護師による研究は事例研究がほとんどで成人を対象とした質的研究は極めて少ない。よって、成人期のてんかんをもつ人の体験を明らかにすることは看護にとって有用な情報となり、ケアの質の向上のための示唆を得るために重要である。

本研究の目的は、てんかんをもつ人が病気であることに気づく体験と発作体験、病気と共に生きる体験を明らかにすることであった。研究参加者は Snowball Sampling で抽出した難治てんかんの診断を受け、手術を受けた 10 名とした。半構成的面接法によりデータを収集し、逐語録を質的に分析した。その結果、病気であることに気づいた体験は【周囲の反応を知る】などにより病気かもしれないと思う、【病気に伴う症状に気づく】など診断後に身体の変化に気づく、内服や発作と病気を関連付け日常生活の中で病気と気づくの 7 パターンであった。胸部不快や【手足を動かす】などの発作が起こると、【混乱し、その場にあった行動ができない】など自分をコントロールできなくなったり、【発作中は意識がない】ため、【自分の状況がわからない】こともあった。参加者にとって【発作は嫌な思いをさせる】もので、発作が起きるたびに気持ちが落ち込みうんざりしていた。【医師の指示通り守っても発作は起こる】ため、ストレスや負い目を感じ、発作は【精神的負担をかける】と捉えていた。そのため、【自分の中だけにとどめたい】と思い、【発作を隠そうとする】努力をしていた。発作が起こらなければ、【普段は普通に生活できる】と語っていた。このため、【病気を認める】思いと【病気であることを信じたくない】思いが存在していた。更に、参加者は【社会では受け入れられにくい】病気と感じ、【病気を隠して生活する】ため【発作に怯えて過ごす】ようになっていた。てんかんをもつ人の看護では、本来の自分と発作時の自分に対し自己同一性を認識することが困難であることを念頭に置き、社会的経済的問題を見逃さないよう配慮する必要がある。